

浄土

三月号

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別掛承認雜誌)
昭和四十年二月二十五日 印刷 昭和四十年三月



法然上人鑽仰会



表紙の解説

国宝 聖 観 音 像 (銅造)

鶴林寺

白鳳という時代は、日本の文化を作りあげるために努力した飛鳥から、純日本文化へと飛躍した天平への、なくてはならぬ清新な時代であった。いうならば青春の躍動期である。きわだった眉、きれいの長い目、すっきり通っている鼻筋はこの時代の特色ではあるが、このみ仏にはさらに、しもぶくれたほほと、かすかなほほえみをもつて、私たちに接してくれる。一見、親しみのこもったなかにも気品のあるものを感じる。このみ仏が私たちに強い感動を与えてくれるのは、白鳳という若さに満ちているせいであろう。

迷える人々とともに悩み、ともに悲しみ、ともに喜びをわかちあつた観音こそ、このような親しきを持つておられたはずである。しかもこのみ仏の若さが、悩みにあえいでいる私たちに生きることの喜びと望みを与えてくださるかのように、常に私たちの周囲で生活している人の顔と同じであり、胸のつかえをつい吐露したくなる、そういうお顔でもある。

それにしても、白鳳の人々がこのみ仏になにを拜み、なにを托したか、聞きたくなるほど親しみやすいみ仏でもある。

(石上 善応)

□ よい子に よい本 よい教え □

よいこのパンフレット

はなまつり

価十五円
〒十円

B 5 判 四 ペ ー ジ 多色刷

うた 高橋 良 和

え 井上よしお

野沢 ともかつ

割 引 価

百 部 以上 単価 十三円

三百部以上 〃 十二円

(送料サービス)

見本は郵券二十円にてお申込み下さい

東京都千代田区飯田町の二十一

大 道 社

振替・東京 八二四七

電話(二六二)五九四四

煩惱を断じてぞ、往生はすべきと
申すになりなば、凡夫の往生といふ
事はみなやぶれなん。

法然上人御法語



— 目 次 —

表紙 鶴林寺聖観音像

随 想……………水野隆樹・江戸真珠子・白井陽一…………(2)

香は仏の使いなり……………小布施弘学…………(4)

座談会 現代社会の動きと宗教の役割……………(6)

浄土信仰問答 タタリはあるか……………藤井実応…………(10)

修行について……………小川金英…………(20)

近世文名録 千々和宝天僧正……………高橋良和…………(16)

一法言談 迷信はなぜ生れたか……………(18)

東南アジア旅行記……………佐藤行信…………(13)

家康と信玄の念仏……………鶴田湛泉…………(23)

ご法語をいただく……………(32)

創価学会手引……………(9)

芭蕉のころ……………(27)

編集後記……………(33)

日本浄土教源信の浄土教……………鈴木成元…………(28)

八十の春

水野 隆 樹

(華頂学園長)

新年を迎える毎に何か新しい境地が生活の上に開けて来るような気がしてうきうきするのであるが、本年は聊か変わった感想にひたって居る。私は本年生れて八十回目の春を迎えたが、この寿齢では釈尊も宗祖も世を去られた事になって居る。釈尊は二月十五日、宗祖は正月二十五日とあるから、私も無論此上長くなかうし、殊に老少不足であるから固い事はいえないが、少くとも二月十五日の涅槃まで位は期待してもよいような気がする。自分の生涯を考えるのに、釈尊や宗祖を引き合に出すなどは冒瀆も甚だしいという譏りを受ける事とも思うが、私が生きて行く精神的な素材や力は悉く釈尊と宗祖の汲めども尽きぬ泉から恵まれたものであるから、今更冒瀆などとは考えなくともよいように思う。それにしても釈尊は度すべき者は皆すでに度し終て涅槃に入られたのであるし、宗祖は晩年に

門

江戸 真 珠 子

天皇様のおん事を古くから御門と申し上げるのは、一説に御所の立派なご門のなかにお住いになっていらしたことから、自然に庶民がそのように言い習わしたとか伺ったことがあります。一国の元首を門にたとえてお呼びするのは、いかにも日本らしい発想で、たしかに門は権威や格式の象徴とも思えます。

私が門に興味を覚えるようになったのは、いつの頃からでしょうか。散歩の道すがら好ましい門の前では自ずと足を止め、また古刹をたずねては、先ずそのご門を拝見するのが何より楽しみです。皇居を取り囲むかずかずの門のうちでは、城郭の残影を留める桔梗門や坂下門より、かえって半蔵門のなにげない佇いに心ひかれますし、上野の山に彰義隊のいくさの弾痕を残す、輪王寺の荒れ果てた黒門を見上げると、維新以後の西欧文明の吹きすさぶなかに忘れられてゆく、日本の歴史の

面 魂

臼 井 陽 一

(高校教諭)

家の三才になる子女に、日光東照宮の真影なる家康像の写真を見せたところ、これは違うという。彼女にとって真の家康とは、北大路欣也の扮するテレビの家康であった。三才の童女ならずとも、人間は誰しも一旦自分の描いた人間像に固執するものである。その著書を読んで筆者を想像したり、ラジオで声だけ聞いて一個の人格を慮んばかりたりもする。しかし実際にその御当人と面識を得た際、それまで自分が描いていたイメージと事違つて、がっかりさせられる場合も少なくない。だからテレビを見ていると人ごととも思えず、わが身に引き当て、空怖しくなることさえある。それほどカメラを通して純客観的に人間像を提供することになるからだ。

「四十才を越してから自分の顔には自分に責任がある」とは人口に膾炙した言葉だが、ある映画監督が美人コンテストの応募審

及んでの忍びがたい法難があつたが、化益に溢れて居る辺地の民衆を化導する事の出来るのは偏に朝恩だと逆に喜ばれ、最後には一枚起請文をしたためて、思い残すところ無く、法悦の中に往生を遂げられたのである。従つて、もし一年でも二年でも生き延びる事があるとすれば、徳薄きこの身に取つては、たといささやかなりとも徳を積む機会を恵まれたものと心得て、一日一日を大切に護る心組みで居る。まことに宗祖の『生けらば念仏の功積もり云々』の御氣持がしみじみと身に沁む心地がする。

昨冬、春を待つ用意に、縁日の露店で求めた福寿草一株を鉢に入れて、前年から鉢にあつた紅梅と共に、昼は日当りのよい縁側に据え、夜は暖房の備えのある書齋に運んで、ふくらみ行く蕾を見て居ると、ほほえましい気持ちになる。登校すれば、はち切れるような青春の学生生徒に終日接して、老を忘れて居る事は愚かのようなではあるが、自分も共に栄えゆくような気持にひたる事も大いに意義ある事のように感じて居る。

一端をうかがうような気さえます。早春の一日深大寺を訪れたときには、武蔵野のなだらかな丘陵の懷に立つにふさわしい茅葺きの山門に、ひなびた美しさをしみじみと味つたものでした。しかし門は、そこを通過して人が往き来できなければ意味がありません。その点で国立博物館わきに移築されてある旧池田屋敷表門は、眺めるだけで私には味気なく思われます。やはり東大の赤門のように実用に供されてこそ本来の門の姿でありましょう。

漱石は小説『門』のなかで、主人公の宗助を、独りで門を開けて入ることもできず、さりとて引きかえすこともならず、むなしく門の下に立ち竦んで日暮れを待つべき不幸な人間として描いていますが、わたくしたちも人生の途上にいくつかの通らねばならぬ門をもっているようです。戦後建築様式が西欧風になり、個人の家では門構えなどという言葉も、あまり通用しなくなりました。しかし門構えならぬ心の構えだけは、きりっと正しくもって、一つ一つ心の門を押し開いてゆきたいと思ふことであります。

査に列した折、その日のアトラクションとして木遣りを唱った頭連中が、舞台に勢揃いしたのをつくづくと眺めて、「フーム、どれもこれも皆いい顔だなあ」と唸ったという話を聞いた私は、成るほどと同感したことがあった。仰々しく妍を競う美女たちよりも、己が人生の年輪を層々に重ねた頭たちの顔の方が人の心を打つものがある。

私もかつてただ一度人の顔に感動した覚えがある。デパートの食料品売場で擦れ違つた一人のビルマ僧であつた。鬚金の糞掃衣を身に纏い、痛い程に剃り上げた頭、日灼けた面相に殺いたような驚鼻、眼光は鋭く、これぞ迷妄を喝破した面魂であつた。厳しい修行が造り上げた人間の顔。まこと須臾の出逢いではあつたが、その面貌の強烈な印象は、闇闇を走り抜ける一条の炎の如く、わが脳裏に一人格としての全形象を刻し去つたのである。修行とは己れ自身を見究めることか。人格とは無言にして他者を信服せしむることか。朝な朝な鏡の前に立って、各々がたには己が面魂をどう見られるであらう。

香は仏の使いなり

小布施弘学

(総本山布教師)

人の心を或る一つのこと、強く引きつけておける日数は、七日間が最も効果的だそうである。五日間では趣旨が徹底しにくいし、さりとて十日間では気分がだれてしまう。六

日間働いて一日休むところの、一週間は肉体的にも、精神的にも私達にとって適した日数である。今日一般に防火、衛生、交通、防犯等の週間運動が行なわれるが、旬間、月間のそれよりも、結果がよいそうである。

寒くもなく暑くもない三月と九月の下旬は、身心共に爽やかである。厳寒には道心が起りにくく、炎熱の土用にも心が信仰に向きにくい。彼岸の七日間は、一つには祖先の冥福を祈る週間であり、二つには心を修める週間である。

彼岸とは(詳しくは到彼岸)、煩惱に穢れた現在の生活(此岸——娑婆)を厭い捨てて、理想の明日に向って生きようとするものである。私達の今日住むところは、見惑(迷い)の世界であって、汚れたものに眼を奪われ、みだらなものに耳

をかし、悪しきものに向って知らず知らずの内に煩惱の沼に引き込まれていくのである。

見よ、泥中に育つ白蓮を。

人も近寄らないような悪臭を放つ池に育っても、其の花卉は少しも泥に汚れず、彼の芳香は百花の追従を許さない。

私達はたとえ、このような無常(むなしさ)と罪惡(にぎり)の渦巻く処に身をおいても、せめて心だけはそれに惑わず、穢されずに生きたいものである。それにはみ仏によって築かれ飾られたところの、明朗にして光り輝やき、正義の尊重される和悦の理想郷(彼岸)を憧れなければならぬ。そして、そこにましますみ仏の本願(衆生救済の思召)を深く信じ、み名を称えることが肝要である。

彼岸の世界を、まのあたりに表顯したものが各家の仏壇である。仏壇は家族の心を照らす燈台であり、真理の象徴であり、み仏と私達の先祖が俱会一処する和順の姿である。

一家の寄る辺は、決して金庫やテレビのある所であつてはならない。信仏崇祖の心を持って、この仏壇の前に恰も生ける人に仕えるように、供養していくことは立派な家風をつくり、品性を陶冶する道である。

今日、「期待される人間像」には、家庭における宗教教育が絶対に必要であると云う世論が昂まっていることは当然である。

実に環境は人を支配し、眼耳鼻舌身の五感は、私達の心に大きな影響を与える。脂粉に明けくれする生活は、人を遊惰にし煽情的なりズムはおのずから心を腐敗させる。

毎朝仏壇に立てる銘香の一炷は、家中に芳しき香りを漂わせて私達の心を浄め、毎夕打鳴らす鑿の音は迷いの夢をみている私達を揺り起すのである。

香は仏の使いとなつて信心を喚起させずにはおかない。

あの歌舞伎の舞台において役者の綺羅から漂うてくるように思われる匂いは劇場の隅々でソット焚かれている沈香の香りであり、東京オリンピックの開会式の時、ロイヤルボックスに菊の香りが流れて来たが、これは菊の花から摘出した香料を、物蔭から撒布する裏方の計いであつた。ボックスの周囲に飾られた菊の花の美しさが、一層効果的になつたのである。観客の視覚と聴覚は更に臭覚によって助けられ、世紀の

祭典を唯恍惚と見つめたのであつた。

私達の五感が、邪なものにすぐ誘惑され易いのはこの心の中にそれに同化する煩惱が潜在しているからである。つまりぬものに心を向けしめるも煩惱であれば、またそれを心の中に誘い込んで私達をくさらせていくも煩惱のなせる業である。また、人の心は法然上人が云われたように、猿が木の枝に飛び廻るにも似て、ひとときも鎮まらない「浮動」であり、悪しきものにすぐ染着しやすい性質をもっている。磁石に砂鉄がすぐ吸いよせられるように、煩惱に引き寄せられる弱さをもつ私達に、厚い同情をよせて、み仏の「不動」のみ胸に抱き寄せて下さるのが本願力である。

水と火の 燃えてさかまく その中を

お慈悲のみ手に 抱かれてゆく

貪慾に流されることなく、腹立ちに身を焼くことなく、絶えず覆いかぶさつて来る愚痴の黒雲に行く手をさえぎられないように。そして彼岸の世界をみつめて、白道を踏みはずさないように生きたいものである。

一声々々の念仏によって、穢れた世界をあとにして、美しく清らかな明日に向つて雄々しく前進しなければならぬ。その度生の道は、一人旅ではない。行往座臥、み仏に手を引かれてゆくところの楽しく、力強いものなのである。

現代社会の動きと宗教の役割

— 浄土のビジョン —

寺と檀家の問題

司会 さきに、局長さんのいわれた個人の信仰の自覚的なムードもあるということだったと思いますが、具体的に、寺と檀家という関係についても、この問題は直接響いてくると思うのです。これも局長さんが、一寸云われましたけれども、いま学長さんが云われた立場で、浄土教団或は浄土教というものが、寺檀関係に関するかぎりにおいて、今後の指導、または信者の方からすれば、在り方といえますか、その辺について、局長さんのお考えはいかがでしょうか。

鶴飼 私も、その点について、いまの佐藤先生のお話に関連しているのですが、先きにも云ったようにハワイの仏教は明治、大正のよさをもっているといったが、これは、形式的なよさであります。実は、ハワイ訪問団を組織し、総長も、インドに行くのを止めてハワイに行かれた。その一番大きな問題は、ハワイ開教のてこいれという問題である。いまでも印象に残っていることは、それはハワイ島のある教会のWBAの幹部と話をしたと

きに、こういう言葉がでてきたのです。それは、二世三世が仏教を離れてキリスト教に入ってしまった。どうしてかとその理由をたずねたら、若い人たちは「こちらの仏教の開教師の先生には、死んでからのことを聞けばいいのだ。けれども、我々は今、生きて行くことについての相談だとやはりキリスト教の先生の方が、話がよくわかる。だから我々はキリスト教に一応ゆくんのだ」というのです。

浄土宗信徒の無自覚さ

それともう一つこれは一週間ほどまえのことですが、私が夜中に自坊に帰るときに、四十分ほどタクシーに乗り運転手と話をしながら帰ったのですが、そのときに、運転手が、私は浄土宗の寺の檀家だということです。それで創価学会の折伏をうけた話もしているのですが、それを聞いてみると、かれは自分は浄土宗の檀家の者だという意識はある。個人がどこまでその意識をもっているかというとはつきりしない。その表現の中で、「私は先祖代々南無阿弥陀仏でやってきたから、私もそれでいいと思っているのだ。だから、な

にもあらためて創価学会に入らなくとも結構だ」というのです。すると、そこには形式的な浄土宗というムードをもっているが、自身を掘りさげて、念仏がありがたいとか、浄土教でなくてはならない、という確信というものがつかめない。やんわりした浄土教というものにつつまれているという姿である。

寺檀と教師の在り方

しかし、受けとる側がそうであると同時に、現在の浄土宗の寺院住職さん達も、その程度のセンスで接触しているのではないか、ということをおそれるのです。これはどうしても、いま松本先生の話にもあったが、今日まで、我々が封建的な寺檀関係の上にあぐらをかいて寺院経営というものをやっていた。それが社会的な影響により盛衰がある。今日までは多少雨風にあたっても、まだ復興できるといふ体制でシリシリとやってきたが、しかし今後再び、そういう体制にもっ 行けるか、どうか。ということとは、社会状況の戦後の革命的な変化により、単なる変化といわれ

ないような、大きな組織面においても、思想面においても変化をもたらした。こういう変化から割り出してくると、過去にあったような、起伏だけではすまないような気がする。これは、どうしても直接個人にタッチする教

出席者

松 本 徳 明

(大正大学理事長・芝学園長・文博)

佐 藤 密 雄

(大正大学々長・文博)

鵜 飼 隆 玄

(浄土宗総務局長)

司 会 安 居 香 山

化をおこなって行かなければいけない。

個人の宗教への脱皮

そこで、いわゆる個人の布教という問題が中心となってゆかなければならない。それに

対して、一般宗派寺院に吹きこむには、そうとうの努力がいると思います。それから、坊さん自身たまたま形式的な寺檀関係によって支えられているために、なまごろしの状態というか、完全に食えないけれども、しかし寺を護っていかねばならない。非常に中途半端な寺院が多い、ということです。この状態がいつまでも続くとは考えられない。

まあ、いろいろな問題がでてくると思いますがたとえば、一時いわれたような財産に対する個定資産税の問題等がいろんな形で、反仏教的な理念のもとに擲頭してくると思う。いろいろの面からいって、私は教師たるものが奮起しなくてはいけないと思うのです。

宗団としての指導力の必要性

それには、いまの寺院の経済力では、一、二の寺院をのぞいて、我々の微力な寺院では、立ちあがりたくとも資力というか、経済力がない。また、それに対する指導理念というものも、それに専念している人が少ないだけに迫力がない。そうすれど、教団という一つの組織のもとに教化の指導力をあたえ、も

しくは、その教化資材を一宗の力で与えてゆくという方針のもとに動かしていかななくてはならない。それには、今までのように、寺とか住職個人との結びつきを中心に考えずに、祖師と直結させるというか、現代人を法然上人と直結させるという運動にもってゆかなくてはならない。それに対する方策を一宗として考えるべきだ、ということが、私は現在の段階でいちばん必要だと思いますね。

浄土のビジョン

司会 最後に、浄土教ないしは浄土教団に対する先生方のもっておられる夢というか、ビジョンというようなものを、総括的にお話いただきたいと思います。

とくに、いま局長がいわれましたように、教団としての建てなおしと共に、将来教団になる、若き指導者というか、かれらに対しての指導という問題も大きな問題としてのこっております。あるいは、教義的にいえば、いわゆる浄土教義というものを現代的にどう生かして、いわゆる現代の夢を実現してゆくか、といういろいろな問題があると思いま

す。それを総括しておねがいたしたいと存じます。

寺に生まれた有難さ

松本 私は、寺で生まれて、それから寺を離なれて生活したのですが、私は寺で生まれたことが非常にありがたいと思う。現在私のあるゆえんのは、生まれるから寺の雰囲気の中で育ったということなんだ。それがなければ、私はどんな方向に飛んでいっているかわからない。その仏教とくに浄土宗の雰囲気や生活の中で大切な幼年、少年、青年期をすごしたということが、現在の私を生かしている。私は現在は、はっきりそこに目をむけて感謝している。そして、自分自身の信仰は、仏教であり、浄土宗である。法然上人のおしえというものにより、私は生かされておる。極楽、地獄がどうかという、そういう問題でなく、もう否定することのできない、阿弥陀さまの中に、自分は生かされておる。阿弥陀さまと共にある。阿弥陀さまがあるとかないとかでなく、そのなかで、日々の仕事をさせてもらっている。

浄土宗団八千カ寺の力が 発掘されるキーポイント

この目で現代の浄土宗団をみて、とにかくこの七千三百カ寺の寺院がある。これだけの寺院を、いま立てるといことは、大変なことでだ。それが、浄土宗というものに所属して全国に散らばっている。その寺院に住職がいる。その住職が本当に浄土教の信仰に生きておれば、今までの因縁から檀信徒になつている人々に、本当の相談の相手となり信仰の手びきをする働きとなつて、あらわれてくるということになる、大変大きな力になる。ただ現実の問題として、これを眺めた所、各寺院の住職一人一人が、本当に浄土宗の信仰というものに生かされているか、どうかということが、キーポイントと思う。これには、いろいろの原因があると思う。インスタント坊さんが非常にふえてきた。一応の儀式ができれば、もうそれで住職になれるというようなことになったものだから、今、鵜飼局長さんのいわれたような心配事が非常にふえてきたように思う。

創価学会手引

数字を示さなくなった学会

最近の学会を見ていると、いろいろと疑問になる事がある。牛田参議院議員が急死したり、日蓮正宗寺院が離脱したりしていることなどがその例である。特に牛田氏の如きは、学会が必ずなおると言っているガンで、年若く死んだなどは、全くもっておかしな話である。勿論おかしな話と言っても、別に人間がガンで死ぬのは、何も不思議でないのであるが、学会が、変な事を強調するものであるから、おかしな話となるのである。

学会側は、この事について何も辨明らしい事を一つも言わず、僅かにその事実を聖教新聞に報じているに過ぎないが、若し彼等の言う理論から言わしむれば、彼は不信心の罰として、死んでしまった事になるわけである。彼に対しては、誠に気の毒な言い方であるが、学会側が、常にそんな事をいうから、こんなおかしい結論になるのである。

それはとも角として、最近、もう一つ気になる事がある。それは学会が、聖教新聞などで、いろいろの数字を発表しなくなった事である。信者の数、毎月の折伏数、寺院の数、その他もろもろの数である。

学会が、今まで最もほこりとし、又大いに宣伝これつとめていた第一が、学会員の数であり、毎月の折伏した数であった。そして、毎月の発表には、必ずその総合計が出されたものである。ところが此の頃は、これについて一向発表しようとしなない。一体これはどうした事であろうか。

彼等は、今や自称、五百万世帯になったと大騒ぎしていた。しかし、この頃では、此の数の主張も余り出てこない。その数の事実があやしい事については、先月号でも言っておいたが、村上重良氏が、「創価学会と公明党」の中で指摘した如く、先ず半数とみてよいだ

ろうという事であった。学会は、こうした学者の反撃にあつて、今更嘘も言えず、黙ってしまったのであろうか。下手な数字も言えなくなつて来たのであろうか。

或いは又、数字を発表する事は、徒らに学会の実態をさらし、恐ろしがられるために秘密主義に入つたのであろうか。

或いは、もうこれで充分という事でふやさないものであろうか。こうしたことは、すべて推測の域を出ないが、何か理由がある事は、確かであろう。

しかし、学会が、これで充分と考えているとも考えられず、又次の参議院、衆議院選挙にあたつて、着々準備しているところからすれば、ますます学会員が欲しい筈である。現に班毎に一人を折伏する事を、月間の目標にすべき事を叫びつづけている程である。こうした事からすると、数字を発表しない事は、秘密主義に入つたか、己に増加が限界に來た為発表できなくなったか、世間の目をごまかしにかかったかなどいろいろと理由が考えられよう。いずれにしても、不思議なことの一つである。

浄土信仰問答

タタリはあるか (二)

藤井実応

(浄土宗布教師)



「タタリはあるか」という質問（前号）に対し、次の実際のお話もつけ加えて答えとした。

昭和二十四年、敗戦後の混乱未だ治まらず、食糧は不足し薪炭にも事欠く時であった。私の住んでいる町内、愛知県小坂井町大字伊奈字舞々辻（通称、前山）の区長（部落会長）さんが或日私を訪れて来た。

「私の部落、舞々辻にある通称『鬼門の藪』の木を伐って子供の遊び場にしたいと思うが、世間ではその木をきると病になり死んでしまうという——私は迷信だと思うがその点を明かにしてもらい迷信だと分れば、その計画を進めたいが」との相談であった。所謂鬼門の藪、というのは広さ約四百坪樹木密生した森で、その中は昼なお暗く、内に何か住んでい

るか分らぬ気味わるい処であった。昔そこに伊奈城主の墓があったが、近くの東漸寺（かつて宇井伯寿博士が一時住職せられていた大寺）に移されて今は何もない。前には罪人の仕置場（切捨場）になったこともあるという。一本でも木を伐ると病気になり死んでしまうといわれるので誰もその森に対し一種の恐れを抱いていた。戦時中に此の近くに住友金属工業の製作所（飛行機材料ジュラルミンをつくる）ができてその従業員の住宅がこの地に百六十戸ほど新しく出来た。周囲は畑で、子供の遊び場がない。森の歴史も一応分ったし、その森の土地も住友会社からゆずりうけたので、この森を切り開いて遊園地としたいというのが区長の発案であった。ところが前に戦時中、その藪のことを知らない大阪の人が引越

して来て、その木をきった為に病になり死んでしまったというわさが流れている。うわさはどこまでが真実か分らぬ、これを明かにするには、その木を伐ったという人は誰か、その人の名や年齢、伐った年月日、伐った木の名、発病の日、そして何の病気で、何日に死んだかなどを厳密に調べる必要がある。これを調べてもらうと、木を伐ったが為死んだといわれる人は、その地の医師の診断をうけていた。その人は大阪からその地に移って来た時、すでに結核で胸を病み相当重かったことが分り、またその病気で何日に亡くなったことも分った。そして木を伐ったこととは関係のないことも明かになった。

「タタルとか、いろいろなことがいわれているので、一度部落の人、一軒に一人は必ず出席するようにして集めるから木を伐ってもタタルなどということはない旨話をしてもらいたい」

と区長から申出られた。私は一席の話ぐらいで、心の中に巢喰っている迷妄が破れるものでない旨話して断ったが、区長はその時に賛否の決を問うて実行に移したいという熱意を示されたので、迷信打破の話をすることを承諾した。その時区長との間に、迷信に就ての話や、その打破の困難についても語りあった。森にはいろいろの霊が住んでいる。住む場所

が無くなれば、場所を無くしたその人にタタルなどいうことは迷信だと分っても原始未開の時代から伝わって来て、今も社会通念にまでなっているものは、容易になくなるものではない、それを浄め払拭する必要がある。それには現実に即した方法を講ぜねばならぬ。先ず寺院方（僧侶）に来てもらって、森の前で厳粛な法要を修する。所謂三界万霊の法供養をする。そして木を伐った後は、観音さまか地藏さまを祭ることにするがよいという具体的なことまで下相談ができた。

さてお話をする日となって私がゆくと狭い会場は満員、百数十名の人が集っていた。私は一時間余り、日柄、方位、家相、墓相、姓名判断、タタルなどいうことは迷信である所以を語り、その打破を叫んで一応話をうって、質問をうけることにした。すると或る一人が立って、

「お話を聞いてなるほどタタルということはないと分りましたが、世の中には万一ということがあるから、万一病気にでもなると困るから私は森の木を伐ることは反対する」

といった。すると、ああだこうだと喧々ゴウゴウたる状態になり、暫く論戦をつづけたが、区長が時をはからって賛否の決をとることとなり、多数賛成で、森を遊園地とすることを決定、他日実行にうつすこととなった。

その日になると、計画通り、寺院方数名（私もその一人と

して参加)によって、森の前に壇を設けて厳肅に法要が行なわれた。それがすむと、区長が最初に木を伐る、しるしのつけてある大木二三を除いては、どの木をきってもよろしい。そしてそれは各自持ち帰ってよろしいということになった。万一を恐れて伐る人は少いかと思ったが、どうして、どうして、薪の乏しい時だ、わがものになるというので、われ先きにと争って木をきり各自持ち帰った。まことに人間というものは欲ふかいものである。その藪は忽ち明るくなった。その後、そこに小さなお堂に地藏さんが祭られ、児童の遊び場となり、その隣の空地と併せて、盆踊りなどが盛に行なわれることとなり、みんなによるこばれている。その後、「タタッタ」などうわさ一つ聞いたことがない。

「タタルことはない」という一つの事例であるが、タタルことはないと理性では分っても情感的に許せぬものが残り易いので、それを修めゆかねばならぬ。宇宙時代といわれる今日、時たま大都会の交通頻繁の街中に、大きな樹木がシメナワを張って取り残されてあるのを見ても、原始未開の時代から伝わってきている迷妄なもの、或は呪術的なものが、今なお、生命を持ちつづけていることが分る。呪術は自己の個体的生命持続を欲望して、何か特別な秘事、誦文、善事によって突如として普通には考えられない大利益を得ようとするも

のである。前述の森の前に壇をきずき法要を修するも、人心の奥にひそむ迷妄を払いのける為に行つたものであるが、よくよく反省してみるとそれで安心することも、法要の中にもまた呪術的なものが含んでいるといえぬであろうか。仏教は之れ、呪術的なものを否定し、乗超えてきた知性尊重の宗教であつた。釈尊の到徹した、無常、無我、涅槃の教えからも察せられることである。仏教の歴史は二千数百年かかる呪術を克服し、脱却し、止揚して真実宗教の開闢の為の努力であつたといえよう。

今日もその努力をしてゆかねばならぬ。

春彼岸の施本

仏教の生活

内容 春のいのち／耳なし芳一／仏教質問帳／俳句／良寛さまのはなし／人生切抜帳／春は観光バスで／金閣寺／仏舍利塔ものがたり／父母恩重経をたずねて／愛語毒語……など明るい話題の本です

A 5判・16頁 一部 2円

50部以上一部 12円 千 実費

見本 切手 30円 申込乞

東京都文京区湯島三組町13

仏教書肆 中山書房

振替 東京 180328 電話 (831)8494

東南アジア旅行記(九)

佐藤 行信

(大正大学講師)

十二月六日

本日は朝九時にミリンダカレッジを訪問した。丁度今日はアンベトカル博士の命日にあたる日だそうで、大学は授業はなく追悼会をやっていた。そこで我々一行もその式に参加し御線香をあげてからエローラに向った。

エローラは、四世紀から十三世紀の頃と云われ、そこには三十四の洞窟の寺院がある。仏教窟が十二、ヒンズー窟が十七、ジャイナ窟が五、全部で三十四の洞窟がある。このオーランガバートからエローラまでの十八哩のハイウェイはなかなか道路もよく高原の景色も雄大で快的なものであった。このエローラには、仏教、ヒンズー教、ジャイナ教の寺院がまじっている。このエローラはあの堅い石

に大きな日本の寺で云えば七間四面の本堂に相当するような僧院を掘っており、また大きな仏像や小さな仏像その他いろいろな彫刻を一枚の岩に彫りつける人間の力の偉大さには感心させられた。ただこの岩山は、アジャンタのような対岩壁がないから、なだらかにみえる。又ここは、天井などの絵画が殆んど磨滅してその痕跡だけをのこしていた。この中で有名なのは第十七番目にあるカイサラ寺院(ヒンズー教)で大きな岩山を二つに割って地面からくりぬいて彫りあげたもので、その壮観さは想像以上であった。

今日はエローラ見学のとホテル



ルに帰り、あらためて午後四時からミリンダ大学でお茶の会に招待してくれた。まず校舎と寄宿舎をみせてくれたがそのお粗末なことお話しにならない。日本の田舎の小学校以下である。また大学生も素足の連中が多いのも驚いた。これも仏教徒の大学をバックアップする社会階層が、アウトカーストの連中が多く財力のないためであろう。小生の一番驚いたことはこの学生が仏教徒と云うと印度政府の奨学金を貰えないので、表面的にはヒンズー教徒になっていると云うことだ。ここのお茶の会も我々日本において考えれば、招

(エローラ)

待したにしては誠にお粗末なものであったが、大学をあげてこれがせいっぱいの歓迎とみれば、その好意は誠に有難たく感謝しなければならぬ。我々一行も大学にわずかの寄附をして帰ってきた。

十二月七日

本日は午前中は自由行動であった。ホテルに道具をもってやって来た床屋に散髪して貰った。勿論頭を洗ったりは自分でやらねばならなかった。昼食後午後一時オーランガバートの飛行場から飛行機でボンベイに向った。丁度我々の飛行機に元フランス首相のマンデス・フランス氏が同乗していた。約一時間半密林の上空を飛行してボンベイに到着した。ボンベイ上空で久しぶりに海をみる事が出来た。ボンベイの空港から約四十分ハイヤーに乗ってボンベイの宿舎タジマハールホテルに到着した。ここまでの道路と途中の景色も、印度で一番近代的で明るい感じがした。

れる大変よい場所にあった。今日はもうこれでスケジュールもないので夕食のあとロビーで港からくる夜風にあたりながら一行の皆さんと雑談の一時を過ごした。もうここまでく



(インドの門とタジマハールホテル)

本日は一日中ボンベイの見学である。朝九時にホテルを出てまず最初に訪れたところはアイランド・オブ・エレファンタ、象の島である。ここは、ホテルの近くのインドの門のところから船に乗り約一時間かかるところにある。ところでこのインドの門と云うのは、一九一一年に英国王ジョージ五世および王妃メリーの上陸を記念して建てられたものだそうである。

象の島の方は、エレファンタの洞穴がみものであり、内部は優美巧妙な七世紀頃のヒンズー教の諸神に関する像で埋められていた。勿論象の石像もあった。丁度今日はまた日曜でもあったもので大勢の人がリクリエーションがてら見物に来ていた。日本の観光地のようになにぎやかさであった。午前中はここだけを見学しました船で一時間インドの門迄帰り、ホテルにて昼食となった。午後は、二時からボンベイで一番美しいと云われているマリンドライブを通ってマラバー丘に行った。このマリンドライブとは西海岸にそったプロムナードで、陸側の方には印度に来て始めてみるヨーロッパ風なモダンな建物がずらりと建ち

るともう日本に帰る日が近いせいか、また食事その他になれたせいか一行の皆さんも元氣になってきたように思う。

十二月八日

ならんでいた。このあたりは夜は海岸からのさわやかな風で涼を楽しむ人々のそぞろ歩きでにぎわうそうだった。このドライブウェイは印度に来て一番快くであった。しかし東京で首都高速道路を車で走る皆様方にはそれほど驚くにあたらない。マラーバール丘と云うのはボンベイでもっとも美しい高級住宅地だそうで、ここから市街の眺めはすばしかった。又、このマラーバール丘の近くに沈黙の塔と称する拝火教の葬場がある。ここは一六七四年に建てられたとのことである。この拝火教の信者パーシ族は、印度の拝火教徒十万人の中、半数がボンベイ周辺に住んでおり実業界に有力な地位をしめているそうである。パーシ族は火を尊敬するので火葬を忌みまた水や土も尊ぶので水葬や土葬もさけ、この塔に死者を安置して禿鷹の餌食とさせ骨は自然に風化して塔の中央に落すようになっていくそうである。この沈黙の塔の中は勿論我々が入れないが、案内人があそこだと教えてくれたその森の中には、禿鷹がたくさんいるのを見ることが出来た。なおこのパーシ族は同信者以外とは結婚もせず、自らインド人とは違う人種と云う

誇りをもっているそうである。このパーシ族はヒンズー教の信者が妻は夫以外の男性は正視も会話もかわさないような封鎖性も深窓性もないそうである。彼らは聖典カータをもちゾロアスターの暦をもちいているそうである。なおマラーバール丘を見学の後には市内を車中から見物して午後四時頃ホテルに帰って来た。このボンベイは、印度のいままでみた町の中で、一番ヨーロッパ的な感じがする町で、住民の顔もいきいきして豊かな感じがした。なお現在の印度における仏教徒は、大部分はハリジャンすなわち被差別階級の人等で仏陀の四姓平等の教化を渴仰することは当然であり、彼らの大部分は経済状態が良くなり職業での下層労働者が、九十をしめているそうである。一日も早く彼らが教育を受けてそれを身につけもっと自由に良い職業に従事して欲しいと思う。なおそれにつけても、仏教徒の指導者層は日本の大学において教育されるようになって欲しいと思った。現在のインドでは、仏教徒の数に対し僧侶の数が少いように思う。

なお今日で小生は、一行の皆様と別れ、現

在西バキスタンのカラチの日本大使館に勤めておる弟に会いに行くため、皆さんが小生のために別れの会をして下さった。小生もこう云う機会にお知合いになった皆さんと日本に帰ったあとも御交際いただこうと思っている。小生のこの後のスケジュールは、カラチに一週間滞在して香港経由で日本に帰る予定である。あとはプライベートな旅行なので、この旅行記も今回で終らせていただこうと思っている。小生のつたない旅行記をお読みいただいた読者の皆様に誌上よりお礼申し上げ、この旅行記を終ることにする。



(マラーバール丘)

千々和宝天僧正

高橋良和

(中外日報取締役)

九州から知恩院の執事長になった人は戦前では佐世保の小田信巖僧正があり、戦後は八幡市の千々和宝天僧正がある。小田僧正のこともいつか書きたいと思うが、今日は千々和僧正のことにふれてみたいのである。

千々和僧正というより、わたくしにとっても三十年来にわたる深い交わりがあったのでむしろ千々和さんといった方が親しい感じがするので

ある。千々和さんは、もともと布教師として、全国的にも知られた人であつたが、若くして、浄土宗の宗会議員に当選し、それからずっと終戦まで宗会議員として活動し例の浄土宗の分裂問題が起きたころは、たしか副議長であつたと思うのである。

八幡といえば鉄の都である。その都にある知恩院別院の華頂寺の住職であつたから寺もよし、布教もよしと、若いころからどんどんとのしあがつて、あるときは知恩院の布教師会長、あるときは教務部長となり、そして最後に知恩院の執事長になったが、さてその執事長となつたときに、いよいよ合同問題最後のどだん場というときに出会つたのである。

その辺の詳しいことを述べると、現在の宗門の要路者がほとんどあらわれてくるから多少さしさわりがあるので、それは避けるが、とも角も連日連夜、千々和さんの苦勞は大変だつたのである。

然し千々和さんはなかなかエネルギーで、よく身体がこたえられたと思うほど会合や秘密会がつづいたのであるが、表面だつての会合はともむつかしくて、ひそかに要人と会うことが度々だつたのである。

一見意志が強そうにみえているがこの人はなかなか神経質などころがあつたので、あるとき、わしはもう知恩院の執事

長をやめて国にかえると興奮したことがあったが、それほど合同問題や、本山の事情は複雑だったのである。

わたしはそのとき、膝をつき合わせて云ったのである。

「あんたがやめて、浄土宗の合同が出来るのならやめてかえりなさい。あんたがいた方が合同が出来るのならやめない方がよいだろう。」

といったら、そうか、わしは合同するためにやってきたのだから、それならつづけてやると決意したのが今でも思い出されるのである。

千々和さんは油こい食べもの、特に中華料理と万才がすきだった。中華料理は毎日でもよいらしく、暇があったり、会合のあとの食事は必ず中華料理を主張したのである。そしてときどき寄席に姿をあらわして、万才や、落語を聞いて心のうさをはらすようなことも度々あったのである。

昭和三十六年の三月一日から法然上人の大遠忌が営まれるその前日のことであつたが、これもある問題が起こって、千々和さんと夜通ししたことがあった。明日からは大遠忌がはじまるというその前日である。しかもその日宮中から和順大師の諡号をいただいて、それを捧持した千々和さんが京都駅から、知恩院まで行列を整えて、かえってきたのである。このとき千々和さんは云った。

あの諡号の箱を捧持したときにはほんとうに重たくて重たくて、身体がくたくたになったとあとで述懐しているが、氏はそのときすでに悪質な病気にかかっていたかもしれないのである。そんなことも知らないで、わたしはこの人に徹夜を強いて、三月一日の早朝本山の一番太鼓が鳴って開白法要がはじまるまである問題でつき合ってもらったのである。途中何度も席を立てかえろうと云ったけれど、わたくしは、それを止めて、遂に朝になって問題がかたづくまでじっとこらえてもらったのである。

随分無理をしてもらったものである。遠忌がすんで間もなく入院したが、この人ほど薬のきらいな人も少なかった。遠忌の前から胃の薬をかくれて吞むようになったのは、たしかにどこかが悪かったのだろうか。それを云わずに遠忌をつとめたこの人の責任感に今さらながらお礼を云いたいのである。千々和さんが逝った日、わたくしは街におらず信州の志賀高原の木戸の湯で、静かに逝く秋を味っていたのであるが、ただ一つ臨終にいなかったのが三十年来のよき善知識の千々和さんに申しわけない気がするが、今でもその経営している華頂寺の幼稚園の園歌がわたくしの作詩であるので、この歌を本堂の脇壇の千々和さんの御位牌はいつも聞いてくださっていると思うとうれしいような気がするのである。

私たちの住んでいる世の中には、ずいぶんと人間の力ではどうにもならないことが多い。いくら立派な田をたがやして苗を植えても、天候の都合では全く不作である場合もあり、害虫によってダメになる場合もある。人間の力、科学の力にも限界があり、偶然がはたらく場合も多いのである。運とか宿命とかいわれているものも皆そうである。

談法言一

迷信はなぜ生れたか

「かなわぬ時の神だのみ」という言葉があるが人間はその力の及ばないような場合、しかも運命がよくはたらくか悪くはたらくかによって、自分の生活に大きな影響のあるようなときには、なにか超自然的なものにたよろうとする。これは、誰しものもっている人情というものである。

人間の力の及ばないというのは、人間にとつては危機である。その危機をのりきるために、溺れる者はワラでもつかむという喩えど

うりに、なにか人間以上の超自然的力にシャニムニ頼ろうとするのである。そこに迷信といわれるものが生ずるのである。

私たちが迷信といわれているものをみれば、すべて何か人力のおよばない危機におちいつていることがわかるであろう。だから、危機が多ければ多いほど、ますます迷信ははびこるのである。

人間の合理的な努力がムダであればあるだけ、迷信は栄えるのである。日本にいま迷信がさかんなのも、日本という国では、人間の合理的な努力がムダであることが多いということを立証している。自分の力ではダメなら人は、なにか超自然的な力にたよるようになりがちである。アメリカに迷信が多いのもアメリカの国柄のものである。

迷信が、この世のなかにどれだけ大きな害毒をながしているかはいうまでもない。

このような迷信が、どうしたらなくなるであらうか。

迷信と科学とは、一般には正面衝突するもののようには考えられているが、実は、ならんでありうるものだということである。現代科学の粋ともいふべき電力会社の屋上に赤い鳥居のキツネ様が鎮座しますということは、その証拠であらう。

迷信は科学の手のとどかないところにその安住の場所をもっているのである。だから、科学がいくら発達しても、科学教育や科学精神がいくら普及しても迷信もなかなか無くない。いくら文明が発達しても、それとは無関係に迷信ははびこるのである。このように、迷信が科学によって解消できないことは明らかである。

迷信が危機に根ざしているかぎり、その危機が解消すれば迷信もなくなるであらう。しかし、その危機のすべてがなくなるということはありえない。なにゆえならば、人間の力は無限ではないからである。

迷信を根絶させるものは、正しい宗教よりほかにはないと思う。

では、どうして正しい宗教が、迷信を解消しうるであろうか。

三

正しい宗教とは、まさしく私たちの生きていくこの現実がいかなるものであるか、私たちの力のおよばない運命というものが、いかなるものであるかはっきり教え示すものである。とくに、仏教とは、この現実の如実のすがたをみきわめることによって、この現実をその底から解決しようとする教えである。

もっと、わかりやすく云えば、仏教とはありのままのすがたをありのままに知る教えである。ありのままをありのままに知るはたらしきを知恵とよばれている。

智恵とは、世間的にいう知識ではない。智恵とは、この現実が本来いかなるものでありいかなる原理によって成りたっているかを知り、はたらしきである。この智恵によって、人はこの世のすべてが無常なもの、うつろいゆくものであること、そこには執すべき何ものもないこと、諸法すべて無我であること、そしてこの原理に徹するところ、そこではこの矛盾の現実がそのまま涅槃寂靜の世界である

ことを知るのである。

もし、私たちが本当にそうだと心になっとくするならば、この世の矛盾、この世の思うようにならないことを嘆き悲しんで、ヤケを起したり、厭世的になったりするようなことはなくなるだろう。

まして、なにか超自然的なものにシャニムニ頼ろうとすることはしないだろう。むしろ逆に、この世の矛盾や不合理をはっきりみきわめた上で、できるだけ不合理をなくするよう努力する勇氣がそこから生れてくるであろう。

迷信は、この世の不合理や矛盾には気づかないで、単に目の前のことに気をうばわれ、それを執着して盲目的になるところに生れるのである。

四

智恵というものは、いくら知識があってもえられるものではない。科学者が迷信におちいるのは、知識はあっても智恵がないからである。智恵は知識というものの手のとどかない、知識の成立する底を知る智である。

この智恵は、私たちにはちよつとえられそ

うにもないが、しかし、それを私たちにえさせるものこそ、正しい信仰といわれるものである。

この智恵をあたえないような信仰は、正しい信仰ということができない。

迷信と正信とは、同じく信仰といっても、単に誤った信仰と正しい信仰という相対的なものではない。両者は次元が異なっているのである。

迷信は、人間の生活する上における、いろいろな矛盾、危機に生れるものであるが、正しい信仰は、人間の生命そのものの危機、矛盾からその解決のために生みだされたものである。正しい宗教は、迷信の生みだされる根源を解決するのである。この解決はいたずらに現実を逃避したり、ごま化したりすることによってではなくして、現実を正視する智恵によって、少しもごまかしもなく正しく解決することができる。この智恵は、ただ私たちには、正しい信仰によってのみあたえられるのである。念仏は、正しい智恵のまなこを開いてくれるのである。

(S・Y生)

修行について

—寒修行四十力年満願御礼—

小川 金英

(花巻市 松庵寺住職)

仏教は理論に終始するものでなく、実行を尊ぶものがあります。仏教の示す道、それは多方面あり、論ずる処も色々ありますが、その根本精神は「仏になる」ことであります。即ち真実の社会人として生活して行くことを教えるものであります。その実践道を六度と四摂法だと教えております。前者は社会人としての自己修養行であり、後者は社会人の社会的行動を示したもので、理想達成、人格完成への実践法と社会全体の進歩理想の実現への項目であります。極楽に往生するということも理想の世界に生き進んで往くとのこととして、浄土というも理想的な社会の達成なのであります。即ち念仏のうちには弥陀の寿光に育てられ、理想の現実化への行動がなさ

れて行く事が修行なのであります。ですから修行と申しても殊更に別行があるわけでなく、毎日同じようなことでも、それを繰返し行ずる間に身心共に清められ一足一足と理想の彼岸へと往生されるのであります。

私たちが各々の業務にはげむことを渡世の道といいますが、いずれも六度四摂法を実践することによって達成されるものなのであります。ややもすると宗教と生活は別々に思っているむきもありますが、実は別ではないのです。仏教は屁理屈や理論の一片に偏するものではなく、明行具足といって、いつでも一体であるのが本領であります。智目行足、知恩報恩、信仏精進、研究改善、菩提涅槃というように必ずこの両面が具足されてあるの

であります。たまたま宗教にことかりて、智の批判に欠ける徒らな行をすすめている輩のあるを悲しむものであります。修行といえは苦行と思い違いをし易いのですが、勿論目的を達成するには精神上にも肉体上にも軌制せねばならぬことが幾多ありますから、気儘や我儘では為し得ないことではあり、そう簡単に修行が出来るとはいえますまい。けれども修行は必ずしも苦しまなければ出来ないものとはいわれません。お釈迦さまは離辺処中と云って、あえて苦しむことが尊いのもなく、樂をしているのが道でもなく、この苦樂の二辺から離れた処、即ち中道が眞の仏道であり、眞の人間道であると教えられました。

私は宗教者として否修行僧としてはたしてこの道の人として、どうであろうかとふりかえって見るとき、お経のなかに心のけがれも捨てきらず、あれもして、これもしてという欲望に目まぐるしく馳走して、己れをも調べきれないでいる人が法衣をまとうたとて、それが何んの価値があるかと、修行者の制服をまとう資格無しとの厳しい戒めに冷汗三斗するのみであります。

勿論いつになつたとて、そんな資格は得られるとは思

いもよらぬことながら、せめて先徳の行履をまねてとはじめたのが寒修行であります。寒修行と申しても特殊の行でもありません。あえて云うなれば、樂なことのみを願うなまけ勝ちな、ずるける者が、この嚴寒の時季一カ月間、寒さにも吹雪にも雨にも耐え、六度と四摂の一端を行じさせて貰う可く、朝六時の勤行に続いて市内の町々を五時間、仏（あかるく）を念じ、法（正しく）を念じ、僧（仲よく）を念じ、四誓の偈の訓読にみ仏の教えを体読し、己れのめざめと、他をもめざめしめん、このめざめの功德を各々の御先祖に手向けて供養させて頂くのであります。

私がこの寒行をはじめたのは前住地日詰の来迎寺でです。膝を没する積雪のなかを、膝で雪をおしながら山坂を越して町に出、凍りつく朝まだきを、毎日休みなく一カ月間行じたのですが、今年で丁度四十年になります。行とはいえ、名のみのもとに御粗末な出来そこないで、むしろ偽善の多い四十年でありました。随分つらいナーと思った日、否いやだと思った日もありました。零下二十四度という酷寒、ついに指三本を凍傷にしたり、天台傘を飛ばされるような猛吹雪、土砂降の雨に背中まで濡れ、犬にかみつかれたり、自動車にころばされたり

氣狂いにどなられたり、乞食に文句をいわれたり、鉄鉢のお金を持って行かれたり、いろんな経験をしました。しかしこれらからそれぞれに得難いものを与えられました。

そして修行しているなどという思い上った私の考えは消えて、行じさせて貰う喜びと、一切をおがめるようになって来ました。よし行中だけだとしても、またこんなささやかな行にもかかわらず、追いかけてまでも浄財の御喜捨をいただき、それも雪や雨にぬれながら共に合掌なさる尊いお姿、行きずりの方の合掌、湯茶の供養等、むしろそちらこそ行をしていられるので、こちらは冥加につきる思いで一杯になります。私はこうした尊いものをこの行を通じておがませていただき、行中いくたの仏に逢うべしといわれている行の功德を体解しました。そのほか仰山の浄財をいただき、その一部は当時の役場を通じ、今日は社会福祉協議会に寄託して、お気の毒な方々に頒けていただき、そのまた一部は児童教化財や成人教化費にさせていただき、のこりで私の否眷族の糧にまで使わせて貰い、寒行が稼業もしてくれました。思っていると、病にありながらも行じました。不思議にもなん

でもないのですが、それもこれも仏天のおまもりと、みなさまの励ましが行じさせて下さったものでして、四十年目の寒行満願を迎えて感激一入なものがありません。いま修行についての私なりな考えと、四十年の寒行成満の御礼を心より申し上げます。

合 掌

無利子・無担保のたすけ合いの金庫『よるひる銀行』をはじめられた、岩手県花巻市の小川金英師は、全国からの温い愛と善意の支援もあって、ますます活発に社会福祉のため活躍されています。小川師の寒修行四十年、己れにきびしい精進あってこそ、教化の活動も、奉仕の生活も、真に生かされてくることを思い、松庵寺文書伝道書「松の庵り」一月号より、ここに転載させて頂きました。

業界一の銅瓦葺専門店 広告の責任重し
何代も研究せる卓越せる技術は他所の出
来ざる価値ある技量と優美頑強安価を誇
る赫々たる定評ある当方へ。建設者請負
業者も他所の倍以上保つと他の広告に迷
わず遠方でも是非とも設計相談乞無料

東京都文京区
春日1丁目9の28

銅瓦職協
相談役問
設計及監

石黒工業

電 (812) 1 5 5 1

信玄と家康の念仏（一）

鶴田湛泉

（一）

月毛の駒にまたがり古猪の怒るが如く馳せ来って、

「せがれめ！　せがれめ！」

と十才ほども年上の信玄を小倅こさいあつかいに
して、鉄団扇片手に謙信が、からかうように
陣太刀で斬ってかかると、

「ウヌッ」

と嚇怒しながらも

（天下に心をかけるほどの者が、佩刀を揮

うようなことではならぬ）と自負心の強い信
玄は、危急な場合に臨んでも悠然と床几しょうぎに腰
を据えたまま刀も抜かずに、軍配扇で謙信を
軽くあしらったという竜闘虎争の川中島の合
戦の光景は、人口に膾炙かいしされている。
この蓋世の英傑信玄が、家康の念仏信仰に
いたく畏敬の念を抱き、言葉を極めて讃嘆し
ていた。

信玄は重臣をつかまえては、

「家康は未だ甚だ若年であるが、日頃節儉
につとめ衣食は極めて質素であって、家来に

対しては方正でよく家臣の心を把み、領民の
情を汲んで徳を以って人を帰伏せしめている
彼こそ、真の武將と云うべきである。伝え
きく噂によると、よく寺に詣で善知識を訪ね
て十念というものを受けているそうである。
これによって家康は疑惑を決断することが出
来て、生死を一如と思うが故に、寡少な兵を
少しも差とせず、一方多勢なる敵にも畏縮せ
ないがために、兵の士気はいつも旺盛でしか
も屢々勝利を得ている」

こうほれほれと家康をほめるのが、近頃の
信玄の一つの癖となっていたほどであった。

天台、真言を信仰していた信玄は、又禪を
も深く信じて妙心寺の学僧岐秀について剃髪
し晴信を法名信玄と改めたのは、彼の三十一
才の時である。その後、明叔、希菴、快川
等について参禪して深く禪の妙諦を得ていた
といわれている。

彼は禪には甚だ造詣深かったが、家康が受
けているという十念というものが、どんなも
のであるかを全然知らなかったのも無理はな
い。

その日、幾日も降り続いてきた長雨がやっ

と晴れ上ったが、未だ空一面に黒い浮雲が重なり合っていて、じめじめした鬱陶しい日和であつた。

つれづれなるままに信玄は已が書院で、曾て今川義元から贈られた藤原定家卿の真蹟の伊勢物語を、机上に繙いて読み耽っていた。

そこへ入って来た近臣長坂長閑が、

「殿、これを御覧下さいませ」

持ち来った二枚の短冊を、うやうやしくささげた。短冊には、今川氏真と北条氏政の二人の近詠の和歌がそれぞれ認められてあつた。

氏真は信玄の姉の息子であつたし、氏政の妻は信玄の長女が嫁していて、いずれも近親の間柄であつた。而も氏真の妻は氏政とは兄妹であつたし、尚、信玄の嫡子太郎義信の妻は、今川義元の娘であつたから、今川氏とは重縁であつた。

長坂としては、日頃信玄が事の外親愛している甥や婿の近詠を眺めたなら、和歌の出来ばえに目を細めてどれほど称嘆することだろうと、主君のよろこぶ姿を想像しながら特意に携えて来たのは云うまでもない。

短冊を手執って読み終ると、法体姿の信

玄は形を改め磐石のように坐し、長閑をかえり見て、

「これはいずれも自作で、自ら書したものでか？」

「ハイ、仰せの通りにございます。和歌といい、御筆蹟といいまことにお見事にございまする」

「ウム」

信玄は短冊を机上に置くと、しばし黙然としていたが

「長坂！」

「ハイ」

「参州、岡崎の家康は、今年何才になったか存じているか？」

突然全く異外な問いに、長閑は不思議に思つたが、

「さよう、今年は確か二十五才と存じまするが」

「ならば、義元公が討死された時は、未だ十九才であつた筈じゃのう」

「ハイ」

「あの年から数えて僅か七年しか経ていぬが、家康は兵をよく治めて三河を圧え、武名

屹然として六十余州に聞え、世の人も現今の武將を指折り数える時には、二三の中に数えて未だ四五とは下らぬ。一戦せぬ年はないほど合戦しているが、而もいつも目出度く凱旋している」

長坂は、信玄のいつもの家康礼讃が始まつたと思つたが、

「いかにも海道の名將と謳われ、誉れ高うございまする」

と相槌をうった。

「そこじゃ長坂、戦えばいつも必ず勝っているのは決して偶然ではないはず、家康の頃の心構えによると思うが、それが何であるか、その方存じているか」

「一向に存じませぬ」

「ならば、よくきくがよい」

「ハイ」

「伝えきくところによると、家康は時々浄土宗の寺に詣で念仏法門をきき、十念というものを受けて疑惑を決断して生死を一如にしているという。それがために、常に僅か二百にも足りぬ寡兵を率いて三千の強敵に抗してもよく敵の鋒先を碎いて降伏させているが、

これは家康が、和歌に巧なるためか、それとも書をよくするためと思うか？」

家康をほめた鋒先をこう転じられると、長坂はどう返事していいのかわからなくなった

「ハッ」

とばかり、恐れ入るだけであつた。

信玄の語がつづいた。

「弓馬を以って国に主たる者が、武事に曉かならず、いたずらに浮幸の末業を好むのは、全くおろかな限りと云うべきものである。日頃軍略を練り戦に臨んで勇猛に智謀にたけているのは、たとえ文字を知らぬと云つても、これこそまことに武門の風雅の者と云うべきであらうが」

「お言葉、御尤にございまする」

長坂は、神妙にきいているばかりである。

「わしはかつて若かりし時、鷹狩に出で、

村落に行くと、屢々田舎の礪臼なるものを見たが、五穀百果いかなるものをも砕いて粉にすることが出来得るが、これは多用の器と云うべきものである。しかし百姓等はこの礪臼を露地やカマドの側に置いて、決して客間などに置いたりして鑑賞などしない。ところが

茶を嗜む家では抹茶を造る礪臼を見ると、よき茶を製するのみに備えて、いやしくも他の

用には使っていない。これは使い通の狭きものとも云えよう。しかし常に客殿や奥座敷に置いて、貴人や賓客の賞玩に供している。これを以って見ると、家康が武勇の才あつて、その余事を知らないのは、これは正しく茶を好む者が風団の如きよき抹茶を製するための礪臼で、これを風雅の者と云えよう。それを見ると、氏真氏政等が書をよくし和歌に巧で、ただ技芸に通ずるのみで武事に精練でないのは、これは全く五穀百果をひき砕く礪臼とも云うべきであつて、はめるに足らぬおろかな極みと思わぬか？」

信玄ほどの猛将も家康の念仏信仰によほど感銘したのか、褒めちぎって置いて、乱世の武將らしからぬ文弱な氏真を舌打するばかりにたしなめる言葉に、長坂は固くなって恐縮するばかりであつた。

信玄が、氏真氏政二人の文芸趣味を批難したと云つても、彼が全然文芸に関心がなかったのではない。信玄は、武弁一片の武將では決してなかった。のみならず、日夜攻伐の兵

馬の間にあつてさえ文芸に励んだ頃があつた程である。

書画にも巧であつた信玄の筆蹟は、彼の気性の如く雄勁なものがあつたし、殊に絵画に於ては兆殿司の画いた「渡唐の天神」を模写した画は、筆管の妙技に達したものが現存している。更に詩歌に心得があつたばかりか、彼が廿才前後の頃、学僧を集めて屢々詩の会を催し、詩作にのみ耽つて国勢を少しも顧みなかったのも、老臣坂垣信方が行く末を案じて信玄を諫めるため、彼自ら密に詩を学んで、終に詩を以って諷諫したと云われる程である。信玄の若き頃の十七篇の漢詩があるし、和歌も百余首にのほっている。

文芸に深い理解のある信玄が、武事をおろそかにする氏真を案じたのも理由のないことではなかった。

義元の跡をついだ氏真は、歌道に凝り「源氏物語に心酔」美女に目のない好色漢で、父の遺業を守るに適せず嬖臣三浦義鎮を深く寵愛して奢侈遊樂に耽つていたため、今川氏の形勢は一変して、その勢力は日に日に凋落の一途をたどりつつあつたからである。

(二)

今川家には十八人衆、或は廿一人衆と云つた羽振をきかせていた門閥があつたが、桶狭間の合戦のとき、或は討死し生き残つたものも散々な敗北を喫して主君義元の生死をも確めずに逃げ帰つて来たので、家中の人々も彼等をうとみ、自らも面目を失つて恥を思い蜚居して出仕しなかつた。更に闇愚な氏真さえ彼等を云い甲斐なき者と見做るようになっていた。

こんな情勢に乗じて氏真の寵を一身に集めていた三浦義鎮が、彼等に代つて巾をきかすようになったのは当然かも知れない。

三浦は生れつき水もしたたるような美少年で、小姓として氏真の寵を受けていたが、長ずるに従つて次第に重用せられ政道を任かされていた。邪智深い彼は主君の寵に誇つて旧臣と権を争い、已れに媚を呈する者は重く用い、己れに追隨せぬ者は功臣と雖も讒を用いて追い払つた。蜚居してしまつた今では、名の聞えた十八人衆などの歴々たる宿将老臣も、三浦の言葉をのみ信ずる氏真に諫言すら

出来ぬ状態であつた。

而し世間の人々は、父義元の弔合戦のため打倒信長の兵を催して尾張三河の地に於て、今にも大合戦が起るであろうと戦々競々としていた。ところが、人々の期待に反して氏真の方に於ては、一向に兵馬の調練もなく、軍慮の評議も開かれていなかった。

一時副將軍とまで云われていた今川家は、古くから公卿と因縁関係があり、京都の文化を採り入れていたため家風は自然と修養に流れていた。そんな中で我がままに育つた氏真は、遊興を好んで踊りと蹴毬が趣味で、政道武辺の心掛けは皆無に等しかつた。明くれば蹴毬、茶湯、河魚、舟遊び、暮るれば酒宴を開き、遊女白拍子を招いて兵庫踊りに興じて逸樂の生活に耽溺していた。

こうした軟弱な氏真の態度をいたく憂えた家康は、

「まことの武士ならば、父の仇を報じようとする志を起さずにはいられましようか。義元公の弔合戦を一時も早くお立て給われよ。その時は真先かけて尾州へ攻め入り、某も信長に向つて鎗矢一筋を射かけて年頃の御恩に報

いたく存じまする」

と誠意をこめた使を再三立ててすすめたが、日夜遊興のみに耽つて弔合戦する意志など毛頭なかつた氏真は、馬耳東風と聞き流すのみであつた。

けれども家康は、幼少のときから義元の被護になつた旧好に報いるためと、且つは自国の近辺に信長方の割拠することを捨て置くことは、畢竟味方の不為と考え、先ず三州広瀬城を手始めに、織田方の小城を次ぎつぎに攻め落し、更に尾州の地にも度々押し寄せ火を放つて焼き討ちをかけていた。さすがの信長の心胆を寒からしめたのか、家康を味方に引き入れようと、信長から使者が遣され慰勲に和睦が申し込まれていた。

その頃、今川家の無二の忠臣、井伊直親は三浦の讒言にかかつて無実の罪により誅殺されていたが、三浦の鬼手はいよいよのびて来ていた。

遠州崇山城主、奥山修理ノ亮貞範は忠勤を勵んでいたが、性質至つて朴直であつた強骨漢の彼は、賄賂を贈ることなど曾てなかつたので終に三浦の憎惡をかつてしまった。

ある日、三浦は氏真の氣嫌を伺つて、

「奥山修理ノ亮は、日頃殿の御恩惠薄きに怨を抱き、近頃織田方へ秘かに通じ御当家を傾けようとする計画をめぐらしている容子にございますれば、このまま捨て置き給わば、後に大事に及ぶでございましょう」

言葉巧みに譏した。

三浦の言であれば何事も用いる氏真は、

「おのれ、につくき、奥山め！」

憤怒に燃えた氏真は、直ちに庵原安房守忠胤、小原鎮実を將とし三千騎を率いて攻めさせたのであった。

こうしていたずらに忠臣を害し、佞臣のみを挙用し、三浦にさえ媚びへつらえば加増も昇進も望みのまま成就するという有様だったので、今川家の氣風も上下とも廢頹して行くのも当然であつた。

今川家の凋落に更に拍車をかけたのは、その頃駿府に流行し初めた風流踊であつたとも云えよう。

芭蕉のこころ

鈴木 裕 輝

俳諧が文芸としての確たる位置を得たのは、芭蕉の出現をみてからである。文芸とは、單なることばの遊戲ではなく、作者の心の精進の結晶と、練磨を重ねた人格の顯現である。人の心に訴える文芸を生み出すには、作者自らの人格を常に高次元なものへと姿勢していなければならぬと信じる。

芭蕉は初期に貞門の流れをくみ、「姥桜咲くや老後の思ひ出」の句をものした。貞門の時代を過ぎ、談林の世間にもあきたらず、彼三十八才の時の「枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮」の句に依つて、在来のことばのしゃれ、表現の技巧をこらすと云う囀の中から抜け出たと云えよう。

真実・風雅を求むる境地に立った彼であつたが、「古池や蛙飛びこむ水の音」を得て、自然の閑寂、輕妙の世界に入ることが出来たのである。これこそまさに天地自然の閑寂と一味の境地に安住した姿であらう。

「嵯峨日記」の「徒然の詞」に

二十二日、朝の間雨降る。今日は人もなく、さびしきままに、むだ書きして遊ぶ。その詞、

喪に居る者は、悲を主とし、酒を飲む者は、樂しみを主とし、愁に住するものは、愁を主とし、徒然に住する者は、徒然を主とす。

と語っているが、現ししする処に身をうちまかせ、余事なくそこに安住する姿は、仏教の真の姿そのものではあるまいか。釈尊の語られた心のあり方、身のおき方と、芭蕉の「花に問え、鳥に問え」の言は全く同じく、現在の在所に身をまかせ私情を交える事なくありのままに見よと云うことである。更に「ひいと鳴く尻声悲し夜の鹿」とうたい、「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」に至って、人間味溢れる可能性の世界に入って行った。痼病の床に伏してはいたが、病い慣れた彼には、死ぬ氣など毛頭もなく、これが辞世の句となるとは思つてもいなかつたであらう。実に人間的な還相の境地であつたろう。この句が彼の最後のものであると云うことはいかに芭蕉らしい心のあり方であると思う。

日本浄土教物語（3）

源 信 の 浄 土 教

鈴木 成 元

（大正大学講師）

古い昔に理想社会をおくことは、儒教といわず、仏教といわず、東洋思想の根本であるが、わが国でも十世紀から十一世紀に入るといわゆる末法思想が人心を強く支配するようになった。仏教の予告的な年代論によると、釈迦の入滅を基準として、最初の一〇〇〇年を正法といい、次の一〇〇〇年を

像法、その後の万年を末法の世とする。正法というのは、釈迦の入滅後、教・行・証の三がまだ完全で、教に従って行ずればよく証果をうるという時期である。像法というのは教・行の二つがあつて証はなく、いかに教に従って行しても証果を得がたい時期である。末法というのは、教のみあつて行・証ともになく、修行する人も証果をうる人はなく、仏法がまったく衰滅する時期である。ところが、冷泉天皇の永承七年（1136）は仏法にいう仏滅後二〇〇〇年の末法時代に入る年

に当たっていた。ちょうどそのころ戦乱・疾疫・天災地変などがしきりに起り、また僧兵の横行などもあつて、末法の当来を信じ、生活に対する希望を失うものが多くなっていた。このような時代の人々に光明を与えたのが、厭離穢土欣求浄土の思想である。

西方十万億土の彼方にある弥陀の浄土に往生しようとする信仰は古くからあつたが、とくに円仁以来、叡山においてもその修行が行なわれ、他の諸大寺も、だんだんこれにならったが、十世紀の中ごろ天台宗から六波羅密寺の空也が出て、踊り念仏をしながら、庶民の間に極楽往生のための念仏行をすすめた。ついで寛和元年（961）源信は『往生要集』を著わして浄土信仰の教義を明らかにし阿弥陀仏の本願を信じ念仏を怠らず往生を期すべきことを説いた。この書は博多の宋商



(高野山聖衆來迎図)

に托されて
シナへ渡り
彼の地でも
広くよまれ
た。いうま
でもなく日
本では画期
的な著作と
して後世に
大きな影響
を及ぼし
た。しかし
この時代の
浄土教はな
お形式的で
あったとい
ってよい。
すなわち仏
の相好を觀
ずる觀相な
どを交え造

寺・造仏に力を入れるという有様であって、質よりも量とい
う傾向が多く、また念仏一行に徹したものではなかった。

浄土教の發達は美術面にも大きな影響を与えた。世間には
源信の作と伝える「山越の弥陀」とか「來迎仏」などがかな
りある。しかし、その全ては源信の作であるという証拠がな
い。多くは絵仏師に画かせたもので、源信は開眼をしただけ
だろうといわれている。現存する代表作は高野山の「聖衆來
迎の図」である。これは衆生が臨終するとき、阿弥陀仏が觀
音・勢至の両菩薩をはじめ、その他多数の聖衆を率いて下り
て來り、極樂に連れてゆく有様を示したものである。普通に
「二十五菩薩來迎の図」ともいわれているもので、全体の構
想といい、色彩の配合といい、実に雄大で美しく、温和でし
かも莊嚴な感を与える。このような図様は、当時勃興した浄
土思想が形の上に具象化されたものであり、優美な芸術とな
って増々興隆の域に向って進んだのである。

また源信は寛和元年（八五五）、花山天皇の勅によって大原三
千院の中に往生極樂院を創建し、ここに彼の母が住んでいた
と伝えられる。この所伝については疑問が残るが、仏教が日
本化した一端を窺に充分な建築ではある。当時の建築は唐風
から和風に変り貴族の住宅として寢殿造が完成した。この様
式は内裏建築からきたもので寢殿に入母屋造、母屋の中は襖

障子や几帳で部屋を区切り、夜の照明には軒に金燈籠をつるし、室内には燈台がおかれ、屋根には緩やかな反りがあり、優美軽快な建物であった。現在この寝殿造で残っているのではないが、当時の寺院建築としては、平等院の鳳凰堂が残っている。平等院は関白頼通の別荘であったが、後は末法到来の永承七年これを寺院とした。鳳凰堂は翌年完成された阿弥陀堂である。構成の均整美と細部手法の巧緻とは、阿弥陀堂建築の代表といわれる。

頼通の極楽思想は父の道長におうところが大きい。道長はいろいろな信仰をもった人であるが、あの世の願いは極楽往生であった。当時の貴族は何の矛盾もなくそう割切っていたのである。今は残っていないが、精緻を極めた法成寺の中に阿弥陀堂を造り、ここで病気を養うとともに、臨終のときは、阿弥陀仏の手から糸を引いて自分の手につけ、その導きによって極楽往生を信じつつ息を引き取ったのである。貴族一般の慣習としてしまえばそれまでであるが、浄土教発達の上からは見逃せない事実である。

このような文化は京都ばかりでなく、地方にもかなり普及していった。平泉（岩手県）の金色堂、白水（福島県）の阿弥陀堂、豊後（大分県）富貴寺の阿弥陀堂などその代表的なものといえる。それはともかく、彫刻の方でも木寄法が発明され

た。いわゆる定朝様式であるが、浄土教の影響が著しく、それが阿弥陀像に最もよく現われた。鳳凰堂や法界寺のように、堂の中央に一体が大きく造立され、円満慈悲の相好をよく表現するのが特色であるが、実に優美である。しかもこの時代には写真に立脚した正確さをもつようになってきた。

この時代で忘れられないのは迎接会であろう。これは迎講会とも練供養ともいわれる。仏の来迎引接にまねて行う一種の法会で、源信が横川の花台院で創めたと伝えられる。これは二五人の僧がそれぞれ宝冠をかぶり、香炉を捧げたり、天蓋をもったり、鳳笙竜笛を吹くなど、二五菩薩の姿をし、迎相の弥陀三尊が安置してある輿を囲んで、講堂から本堂に行き、梵唄・奏楽・誦経・念仏して、観音菩薩がもっている蓮台にのせてある十方衆生と記した位牌を迎えて、再び講堂に帰る法要である。これは、その後大いに流行した。『今昔物語』や『沙石集』には丹後普甲寺の聖人の実例がのせられている。深く弥陀を信ずる人にはそのような有様があらわれることであろうし、事実そのような儀式を行なって往生できる人は無上の光栄であったろう。当時の状態から考えると流行するのが当然であった。

これは単に寺院ばかりでなく、公家や武家も迎接弥陀の像を造りその堂を作った。『扶桑略記』によると、寛徳二年

(108) 小一条院は東京六条第に堂宇を造り、阿弥陀迎接の像を安置して供養を行い、五日十座の講を行なった。『水左記』



(宇治平等院 堂)

る。彼は極楽浄土を欣い、常に念仏を絶やすことがなかった。そして東山に幽閑の地を求めて迎接堂を作った。嘉保三

によると、

承暦四年

(208) 醍醐

山に住む聖

人が、清水

寺の河原

(現五条橋の

ところ) で

迎講を行な

ったという

変ったもの

もある。

『後拾遺往

生伝』には

安房守であ

った源親元

の記事があ

年(208) 安房守に任ぜられたときも仏事にはげみ、精舎を建

てて丈六の弥陀像を安置し、国中に念仏を勧めた。そして十

万遍の念仏を称えたものは一石分の租税に代え、重罪人でも

念仏する者は赦したという。後京都に帰った彼は東山の旧堂

に帰り、逆修の作善を行い、長治二年(218)入寂した。これ

は本の性格上、どのぐらい信用したらよいのか疑問である

が、いずれにしても熱心な信者の一面は出ている。この他、

『中右記』や『百練抄』などにもかなり多くの記事がある。

々例をあげればきりが無い。

この迎接堂のことを一名光堂といった。今は光堂といえ

ば、すぐさま平泉の中尊寺にある金色堂をさす人が多い。そ

してその名の由来も金色燦爛たるためにつけられたのである

うと思われる人が多いであろう。しかし実はそうではない。

藤田寛雅氏の説によると、光堂の光は迎接の弥陀の光を指す

とのこと、なるほどと思われる。

それはともかく、当麻(奈良県)の往生院では今でも迎講が

行なわれている。先日偶然八ミリでその風景を拝見できた。

古式にのっとりて行なわれるものであるが、強く胸をうたれ

た。宗門あげて援助し、末長く残してゆくのがわれわれのつ

とめであろう。それにしても、源信が浄土教発展につくした

力は如何に大きかったかわかるであろう。

ご法語をいただく

煩惱を断じてぞ、往生はすべきと申すになりなば、凡夫の往生といふ事はみなやぶれなん。すでに弥陀の本願力といふとも、煩惱罪惡の凡夫をば、いかでかたすけ給ふべき。えむかへ給はじ物をなど申すになるぞかし。

(往生大要抄)

お念仏を唱える者は、自分は煩惱から離れることのできない身であることと阿弥陀さまの本願が自分を必ず救って下さることとを深く信じているわけです。法然上人は煩惱と往生との関係について詳しく述べられた中に、このご法語があります。

もし煩惱を自分の身体から絶滅しなければ往生できないという教義であれば、凡夫は絶対に往生できません。このようになれば最早阿弥陀さまの本願力といえども、凡夫を救うことができないし、往生させることもできないということになります。

煩惱というのは、われわれの心身を悩乱する精神作用のことです。その根本的なものに五つあって、むさぼり、怒り、愚かさ、怠け、邪まな考えの五つがそれです。

この根本的な煩惱から自然と次のような煩惱が起きてきます。即ちわがまま、怠け心、信用しない、心がほける、悲しむ、はじをしらぬ、怒る、顛倒させる、ねたむ、悩む、恨む、だます、疑う、おごる、そして最後には後悔する等の心となります。

煩惱といえは、すぐ百八煩惱とか八万四千の煩惱とかいう言葉を思い出します。こうした言葉は煩惱が数多くあることを形容詞のようにして申したものではありません。煩惱の種類を数え挙げるのに、その数える方法によって百八種類となり、又は八万四千種類となるのであります。この数字がもとになって、他に転用されているものがあります。例えば百八の鐘とか八万四千の法門とかいうのがそれです。

しかし煩惱の種類の分け方とか、その教え方等はいつでもよい問題であります。あくまで自分の心の動き方を正直に見つめ反省して

自覚することが大切であります。何故なら煩惱は多くの場合、いくつかの煩惱がからみ合って起り、しかもそれと自覚しにくいものだからであります。

人間には煩惱がつきものであります。だからといって、煩惱をむき出しにして平気でいたり、煩惱をさかんにして省みないでいてよいわけがありません。煩惱を断続させることはできませんが、反省し正しい道に近づこうとする努力によって、極力これを押えてゆくことができます。

「かなしきかなや、善心はとしどしに従ひて薄くなり、悪心は日日に従ひていよいよまさる。されば古人のいへる事あり。煩惱は身にそへる影、さらむとすれどもさらず。菩提は水にうかべる月、とらむとすれどもとられずと」

こうした反省こそお念仏のもとになります。煩惱を断ぜよと教える信仰がありとすれば、それは出来ない相談であります。しかし煩惱を持ったままの凡人で往生できるという信仰は、阿弥陀さまの本願力を信じて、素直に唱えるお念仏の信仰しかありません。村瀬秀雄

編集後記

▽陽春に追い出される様に木の芽が出てきました。春だ、春だ、なにか、そんなに大きな声で叫びたくありません。信心も盛んに。▽南の方では不穏な空気が流れて心配です。特に同じ仏教徒が、毎日の様に血と涙を流していることは、悲しい極みです。何とかならぬものかと、ここでも叫びたくなります。国際間の谷間には違いないが、無視するわけにいきません。▽大正大学の浄土宗仏教青年会では、宗務所から団旗をもらって大張り切りです。四月の御忌には、伝道隊も知恩院や、増上寺に出したいと計画中です。頑張ってください。

▽大学受験のシーズンですが、入学率は大学によって五倍、四倍のところが多く、宗門大学はマンモス大

学にくらべ比較的楽とはいえ、各大学とも増員の傾向にあるこの波にのって、大正大学も百年の大計の基本線をうちだしたいところ。佐藤学長は未来図をまとめて、これを具現するため大奮闘、最近の学長は世事に会議に忙しく、じつくりセミナーを開くことも出来ぬ様子です。

▽「彼岸法話」は小布施師が随想集出版でお忙しいなかを特にご執筆願いました。▽岩手県の夜昼銀行の小川さんから玉稿を頂きました。先日の週間誌でも、大いに賞讃されたものです。御苦労を感謝して、益々の発展を願ひ度いものです。

▽長い間、執筆して頂いた佐藤行信氏の旅行記は、これで終りになりました。メモに、メモを取ったこの旅行記は楽しいものでした。インドの旅に行く人には、さぞよい参考となる事と思

います。有難うございました。

▽創価学会の手引でいろいろ反応がありました。特に一説者（貴金属商）が、わざわざ編輯子を訪ねて、激励下さったのには、感激しました。教義的なものによる反響をせよとの鼓舞でした。

▽京都の清浄蓮院の石橋誠道法主が、遷化され残念なことです。米寿の祝賀行事の準備中でした。宗乗の権威者で、浄土にも御願いましたことがありました。冥福をお祈りして、他日、追悼特輯をしてみたいと企画中です。

▽岸覚勇氏が「いかにして浄土宗を現代にいかすべきか」という本を出されました。浄土教の現代版ともいうべきものです。次号に紹介いたします。

新書版、百頁、定価二百円です。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 三月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和四十年二月廿五日 印刷

昭和四十年三月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿二

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

郵便東京八二一八七番

大正大学

学長 佐藤 密雄 東京都豊島区西巢鴨四丁目

- 特色**
1. 西と東、右と左の中道を行く仏教精神が本学建学の基礎である。従って、穏健中正、操守高き学生を育成する事を目標とし、教授凡てが身を以て指導している。
 2. 学生は、入学と同時に専攻別による13の研究室に所属して夫々の教授から指導を受けるほか、研究室の豊富な蔵書を利用して勉強できる。

専攻

文学部＝国文学，英文学，史学，西洋哲学，宗教学
中国学，社会学，社会事業の8専攻

仏教学部＝仏教学，梵文学，天台学，真言学，浄土学の5専攻

大学院＝修士コース，博士コース（仏教学，宗教学，国文学）

昭和40年度1年の募集人員は200名，男女共学試験科目は，国語（漢文をふくむ）社会，外国語（英，独，仏のうち一つ）

試験期日 第2次 3月26日・27日（金・土） 詳細は入学案内を参照のこと

信仰随想

六字の石庭

小布施弘学著 善光寺大本願白道会発行
新書判 210頁 価 200円 ㇔ 30円

檀信徒教化最適の契機
現代人に念仏信仰の真髄をつたえる好適手引き書

総本山布教師，長野県松代町・長明寺住職として活躍する著者の布教生活25周年を記念して上梓された本書は単なる随想集ではない 著者自身の布教に対する ひたぶる情熱と 念仏信仰に生きる 歓びが 行間にまで 溢れている 人生と信仰をかたる 本書は 現代人のすきんだ心を 暖くつつむ

目次

- はじめに
石庭にたちて
流転の庭
- 1、時の流れ
 - 2、今日も旅ゆく
 - 3、百日紅
 - 4、ネフロゼ
 - 5、死をみつめる
 - 6、道遠し
 - 7、にぎり江
- 遣迎の庭
- 1、煩惱無尽
 - 2、悟りと救い
 - 3、活動せる仏
 - 4、声の宗教
 - 5、安全地帯
 - 6、ああ石は語る
 - 7、夢か現か
- 寂静の庭
- 1、鹿おとし
 - 2、涙を流す日
 - 3、つくばい
 - 4、ド根性一代

申込所 善光寺大本願白道会

長野市元善町
振替長野五五七
電話長野②二三六〇